年式相応のパーツが必至！
BRCの改良大安心パーツ群！

空冷4発専門店 BRCの強み！

空冷４発のパーツを多く取り扱う、徳島のBRC。特にパーツ点数が多く目を引くのがヨンフォア部品で、手軽に交換できる外装パーツをはじめ、エンジン内部部品も多く取り揃える。またセレクトパーツを扱うだけではなく、オリジナル開発商品も多く年式ならではの問題が生じるであろう部分の対策パーツも豊富に用意されている。

■撮影：鈴木広一郎　■文：編集部
■協力：BRC

BRC
徳島県徳島市住吉５－８－31 ☎088-622-0003
HP:https://www.brcinc.co.jp/

BRC 代表：渡辺美視氏

上野のバイク街にて10年勤務し、その屋号を引き継ぎ1991年よりBRCを開業。BRCは「バイク・流通・センター」の略となっている。趣味の船釣りは航行区域無制限！

車種を絞り込んだからこその強み！

空冷４気筒車両の部品や消耗パーツを多く取り扱う、絶版バイク部品専門店のBRC。店舗は徳島県にあるが、通信販売がメインとなり顧客は全国に広がる。空冷４気筒のパーツは、時代にとらわれず人気の浮き沈みが少なく安定した需要があるため、空冷４気筒でも４００ccメインで取り扱う。とはいえ、代表の渡辺社長が純粋に空冷４気筒好きというポイントが大きいのかもしれない。

「私自身、実際に乗ってきたのも所有しているのも空冷４気筒ばかりなので思い入れはありますよね」と、渡辺社長。

渡辺社長がBRCを立ち上げる前は、二輪販売店に勤め数多くの車両の修理や販売を手掛け、中でも70年代から80年代の空冷４気筒車両に関しては熟知しているとのこと。その後91年にBRCを立ち上げ、当初は車両販売も行なっていた。販売方法は通信販売がメインだったために、遠方のユーザーが困らない様に、基本的にエンジン腰上をバラし泣き所を改善するというのが当然のサービスだったという。当然、それぞれの機種の理解度をより深め、対策を講じるアイディアも生まれ、そのアイディアを活かしたパーツが誕生することとなる。２０００年に現在の徳島の店舗に移転した際に、メインの事業を車両販売から部品販売に切り替え、現在に至る。

店舗を見渡すと、それぞれの機種毎の棚にパーツが分けられ陳列されており、中でも目を引くのがヨンフォアの商品点数の多さだ。素人ながらに、その商品点数の多さを目の当たりにすると、一台丸々レストアできるのではないかと思ってしまう。

「メーカーの純正部品の製造は12年くらいで中止になります。その後は、毎年毎年欠品パーツが増え、現在ではヨンフォアの純正部品は1割程度しかありません」

誕生から50年近く経つバイクの純正部品の供給が、1割もあるということに驚いてしまうが、他機種にも使用される共通部品を含むからだという。たいう事例もあり、純正とは異なるステンレスの部品も多いとか。もちろん、ファンに応えるために、純正同様のユニクロメッキとステンレスと2種類存在部品もあるとか。どれだけファンに優しいのやら……。

また、ケースの歪みに対応する厚みを持たせたガスケットや、装着しやすいベースに合った形状のガスケット等々、純正部品のレプリカパーツの製造販売だけでもユーザーは嬉しいはずだが、車両販売時に得たノウハウが活きる、いわゆる『対策部品』にも空冷４気筒への愛を感じてしまう。

「中古のヨンフォアの右側のサイドカバーは、必ずと言って良いほど爪が欠けているんです。バッテリー交換とかで左側に比べて取り外しの頻度が高いんでしょうね。なので、BRCでもサイドカバーを販売してますが、爪の部分を強化し折れない仕様にしています。こういった、一つ一つのパーツを吟味し、バイク屋として得られたノウハウを活かしてパーツを開発しているので、ただのパーツメーカーと異なるかもしれませんね」

さらに。

「ヨンフォアのヘッドガスケットは純正で出たりするのですが、ヘッドカバー等が経年で歪んでしまっているものもあり、オイル漏れに繋がってしまうことも。なので、純正部品よりも厚みを持たせたガスケットを用意しています」

新車当時と異なる、とんでもない時間が経過した現状のケースを視野に入れた対策パーツ開発というのは、気が利きすぎているとしか表現のしようがない。

「扱う車両を絞り込んでいる強みとして、『BRCで買い物をすれば全て揃う』といった品揃えです。あればあっただけ良いですからね。純正部品や社外部品も扱っていますが、BRCオリジナルパーツは約7割りほどになります」

現在、ヨンフォアのパーツで店頭にて動いているのは、消耗パーツが主流だという。オーバーホール目的で10数万円分のパーツを購入される方も少なくないとか。ヨンフォアパーツで困ったら迷わずホームページをチェックしてみてはいかがかな？

だし、純正部品が欠品することイコールBRCオリジナルパーツが増えるということでもある。

「純正部品がなくなったら困りますよね？　作れる物であれば、それは作りますよ。ただ困るのは、欠品になっても『欠品になりました！』というアナウンスがないんですよね。毎年毎年、オリジナルパーツが増えていっているのは確実ですね」

ネジひとつとっても様々な長さや太さがあるので気が遠くなってしまう。

「純正に合わせ加工をするのは当たり前ですね。困るのは、当時はクロムメッキだったのに、補修部品になったらユニクロメッキになって、装着したら色が合わないということになる。そこでBRCでクロムメッキして売らなくてはならないと」

以前、純正部品でレストアした車両が1年もしないで錆だらけになったとみを持たせたガスケットを用意しています」

bimota 仕様　CB400FOUR

BRC デモ車両

ビモータの完成車ではなく、当時の製品やキットパーツにこだわって仕上げられたビモータ仕様のCB400FOUR。マキシム製フロントキャリパーやリアディスクバックステップキットや当時モノのブレンボ製キャリパー、さらに珍しいマービング製セパレートハンドルを装備する。スタイリッシュなビモータ仕様に仕上がっているが、フレーム加工は一切なく、全て外装パーツはボルトオンにて装備されている。ステアリングダンパーも当時モノのクランプ式ステーを用いている。オイルクーラーもロックハート製を装備。ちなみに、BRCでは、「ロックハート」のコア用純正ステッカーを販売している。ビモータの外装に合わせた足周りやブレーキ周辺パーツ等、徹底したこだわりにより完璧といえる雰囲気作りに成功している。

とても珍しいステー一体型のマキシム製2ポットフロントキャリパーと、ノーマルディスクと組み合わせたフロントブレーキ。リアホイール同様にビモータ製ホイールを装備。

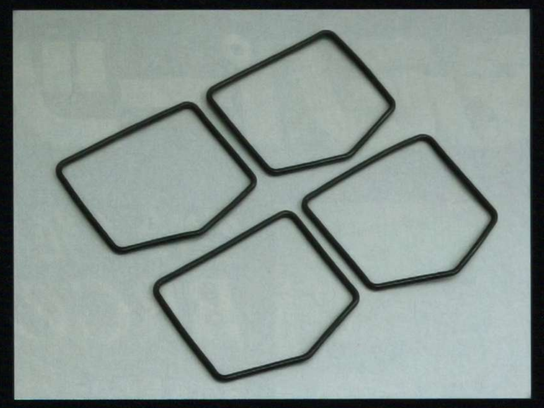
↓ビモータの外装に合わせ、イタリアンな雰囲気にマッチする当時モノのスリット付きキジマ製アルミカバーをチョイス。「ノッペリとしたノーマルのサイドカバーより合うと思います」渡辺社長。

当時のカフェレーサー達にとっては垂涎の的だったビモータ製外装キット。欧米人の大柄な体格に合う、ロングタンク仕様のいかにもなビモータスタイル。スウェード調のシート表皮もベルトも美しく原型を留めている。

ビモータの「b」の文字がデボス加工されたフロントフェンダーは、CB400FOUR用ではないものの、スタイリングに合わせチョイスする。薄型でスタイリッシュなフェンダーはビモータ外装にマッチしている。

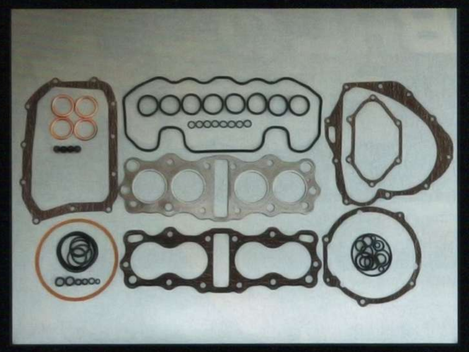
BRC

永く乗るためのアイディアパーツ!



ホームベース型で厚みを増している！ 純正キャブ用フロートチャンバーガスケット

純正のフロートチャンバーガスケットは丸い形状で、取り付ける時にボンドで固定しなくてはならなく、ズレたりして噛み込んでしまうことも。BRC製品は最初からホームベース型で、しかも0.2mm厚くなっている2.2mm仕様だ。



厚みを増したヘッドガスケットに注目！ NEW 強化エンジンガスケットセット

ヘッドカバーガスケットは純正3mmから3.5mmへ、ヘッドガスケットは純正1mmから1.6mmの厚さにそれぞれ変更し、カバー類の歪みに対応。現在流通している純正の緑色のガスケットから、新車当時に使用されていた黒色を採用。

小さな部品でも効果絶大！ キャブレターダストプレート

４連のキャブレターを同調させるのに重要なパーツ。純正キャブレターの同調調整ボルトの横に使用するBRCオリジナルのメガネ型連結プレートは、純正0.5mm厚に対し２倍の1mm厚で連結能力を高めている。

CRキャブ装着のためのアイディア商品 ガソリンコック＆CRキャブにあたらないガソリンコック

CRキャブレターを装着すると、408用のガソリンコックのままだと干渉しタンクが浮いてしまうが、その対策コックを用意。もちろん、398用、408用共に純正のガソリンコックもラインナップする。

他多数!!

スイングアームやホイールはビモータ製。ディスクブレーキ仕様のホイールだったため、バックステップキットともにCB50用のフロントディスクと機械式キャリパーを採用。リアサスはコニ製。

オートショップフクイ製を模したリアディスクバックステップキット。目の細かいローレットなど忠実に再現している。ドラムブレーキ対応で、スプリング部分が強化されている。現在、再販に向け準備中とのこと。

エンジンは450ccへ排気量アップを果たし、Φ26CRキャブレターをセットする。マフラーはBRCオリジナルショート管を装備。レアパーツで固めた中にもオリジナルパーツを溶け込ませている。

レアパーツのマービング製セパハン。トップブリッジのクランプボルトを利用し、トップキャップにネジで固定する。トップキャップはワンオフ物で、ネジ穴はセンターではなく、若干オフセットが必要といった苦労の賜物なのである。